四日市看護医療大学

インドネシア看護師サポートチーム

✿はじめに

我が国は、2008 年 8 月より経済連携協定（EPA）に基づき、インドネシアから看護師・介護福祉士の受け入れを開始しています。その受入れ目的は、日本の医療現場の看護師不足への対策ではなく、国際交流や国への協力で行われています。EPA 看護師・介護福祉士候補者は、日本の国家試験に合格しなければ、日本で看護師・介護福祉士として働くことはできません。2013 年の EPA 候補者のうち、看護師国家試験では 311 人中 30 人が合格、介護福祉士国家試験では、322 人中 128 人と、まだまだ合格者が少ない状況です。

私たちは経済連携協定(EPA：Economic Partnership Agreement)に基づくインドネシアからの看護師・介護福祉士候補者育成に伴う国家試験対策及び日本語支援を行なっているチームです。私たちのサポートチームは、2012 年に発足し国家試験の合格に向け頑張っているインドネシア人看護師候補者のサポートから始まりました。1 名は既に国家試験に合格し、日本の看護師として働き始めています。2013 年より新たに介護福祉士候補者 2 名のサポートも行い、現在 4 名の EPA インドネシア看護師、看護師候補者、介護福祉士をサポートしています。また、サークル活動については NPO 看護師・介護福祉士教育支援組織の協力を得て行っています。

しかし、私たち看護師国家試験の受験経験もない看護学生であり、特に介護福祉士について学習する機会はほとんどありません。このような状況の中、看護学生ができることは何か、看護と異なる分野での支援はできないのかなど試行錯誤しながら行っています。

※EPAとは特定の国や地域の間で、関税等を撤廃し、モノやサービスの貿易の自由化を図ることを目的とする「自由貿易協定（FTA）」を基礎としながら、投資や人の移動、知的所有権など、より幅広い対象分野について、経済関係の強化を図ることを目的とする協定です。

✿グループのメンバー構成

インドネシア看護師サポートチームメンバーは 1 年生 14 人、2 年生 5 人、3 年生 6 人、4 年生 6 人の計 31 人で活動しています。

✿活動を始めるきっかけ

現場で働くインドネシア人看護師は、医療専門用語の理解が困難である、方言や擬音語など日本語特有の表現がなかなか理解できない、医師・看護師とのコミュニケーションがとりにくいなどといった問題を抱えています。これは、インドネシア看護師への明確な国からの教育システムがなく、病院や施設に任せきりになってしまっていることが原因と考えました。このような、現状を知り「何か私たちができることはないか」と考えた結果、サークルを設立し、NPO 外国人看護師・介護福祉士教育支援組織の協力のもと、私達に出来る範囲で支援を行おうと活動を始めました。

✿活動の目的

私たちの活動の目的は、インドネシアからの看護師候補者と介護福祉士候補者に、国家試験に向けた学習のフォローを行い、国家試験に合格できるようともに学習しています。既に国家試験に合格して看護師となったインドネシア人看護師には、医療従事者として現場で活躍できるように、日本の文化を知ってもらい、多くの日本人の生活や気持ちが少しでも理解しやすくなるように働きかけています。

この活動は、インドネシアからの看護師・介護福祉士候補者の支援だけが目的でなく、私たち看護学生自身の国家試験対策に繋がると共に文化交流の場ともなり、国際的視点、広い視野を持てるよう成長していくという目的もあります。

✿現在の主な取組内容

現在の取り組みとして、1、2 年生が介護福祉士候補者、3、4 年生が看護師候補者に対して国家試験対策を行っています。

1、2 年生の取り組みとして、毎週木曜日の授業後(17：50～19：20)に、介護福祉士国家試験の過去問を日本語の読み方や意味を説明しながら進めています。また、間違えたり、分からなかったりした日本語の読み方や意味を簡単なテスト形式で確認するなど、楽しく覚えられるような取り組みもしています。学生が長期休暇の時は、介護福祉士候補者 2 名が働いているサンビュー四日市へ行くなど、病院の協力を受け支援を行うこともあります。

最近では、生徒が「わかりやすい社会保障」という本を参考に、内容をわかりやすくまとめ、発表する勉強会も行っています。

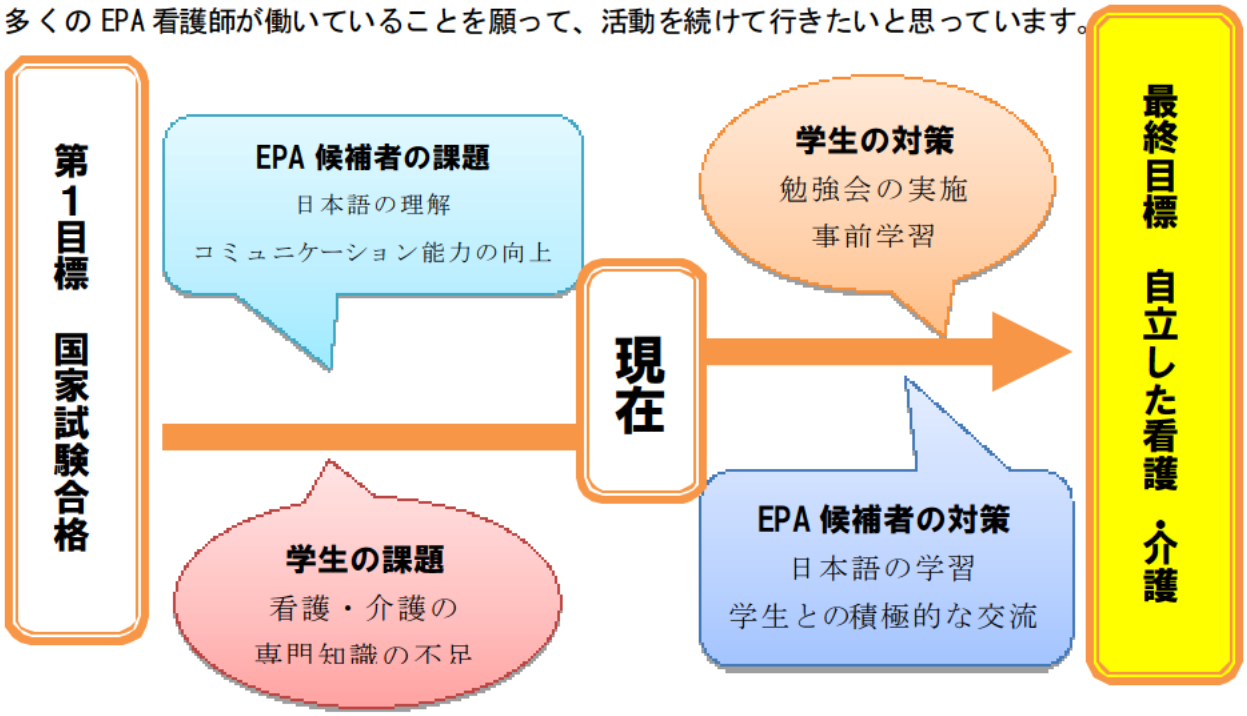
3、4 年生は看護師候補者の国家試験対策を中心に行っており、週に数回、共に国家試験の問題を解きながら、日本語として理解できないところは説明をし、解説を活用しながら、合格に向けて学習を進めています。特に 4 年生は、同じ国家試験を目標としているため取り組みにも熱が入っていました。

昨年の 12 月には、「国際ボランティア支援基金」に提案した企画として、現場で働くインドネシア看護師 5 人を招き、交流会を行いました。これは、インドネシア人看護師同士の交流の場だけでなく、インドネシア人看護師と私たち生徒との交流を図り、インドネシア人看護師が現在どのように現場で活動しているのか、どのような支援を求めているかなどを聞き、今後の活動に生かす交流の場にするという目的で行いました。ゲーム形式で自己紹介を日本語を使って行うことで、コミュニケーションをとったり、ぜひ日本文化の体験をしてもらおうと茶道を行ったり、「ここが変だよ日本人 2013」という企画で、実際にインドネシア人の暮らしについて聞くことで、日本人との生活の違いを知ることができました。

交流会の様子

✿現在の課題と今後(将来)の方向性、夢

私達の活動は、EPA 看護師・介護士候補者の国家試験合格を第 1 目標とし、合格後も現場で自立した看護･医療を行えるように手助けをしていくことが最終目標です。この目標に到達するためには、インドネシア人看護師・介護福祉士は、言葉・文化の違い、コミュニケーションなどの壁を減らしていくことが課題になります。また、看護学生側として、正しく日本語が説明出来ているのか、またきちんと伝えられているのかが不明瞭であるなどといった課題があげられます。課題を克服するためには、積極的に日本語を使ってコミュニケーションをとることが第一だと考えるので、サークル内だけでなく、地域のさまざまな人とコミュニケーションをとる機会を増やしていけたらと思っています。また、私たち看護学生自身は看護と介護福祉の専門的な学習を進め、的確な日本語を用いてその状況が説明できるように専門的知識と国語力を高める必要があると感じています。

現場で働いているインドネシア人看護師・介護福祉士の皆さんは、知識や技術はあるのに、言葉や文化の壁があることで、母国で働いていた時より活躍できる場が少なく、満足いくように働くことができないという意見を持っている人が多いそうです。臨床現場で安全に看護や介護を行うためには、患者さんとのコミュニケーション、電話応対、報告、連絡、相談、記録など、働く上で日本語の能力が重要となってきます。そのため日本語の能力が不足していることでコミュニケーションが思うようにとれず、合格してもモチベーションが下がり、インドネシアで働いていた時のように生き生きとした看護ができていないのではないかと考えられます。生き生きと働いてもらうために、現場で実際に行うような患者さんとのコミュニケーションなどのロールプレイを行っていくのも、候補者の皆さんにとっても、学生にとっても現場に出てからの練習になるのではないかと思います。この他にも、私たちに出来る限りの支援を積極的に行っていきたいです。

日本とインドネシアの文化を互いに理解することで、文化の違いを知ることができ、文化の壁を越える方法を見つけることにつながると考えています。日本の文化や言葉を学ぶ機会を設けたり、積極的に交流会などの場を開くことで、交流を深め、共に医療従事者として広い視野を持った看護が行えるような人に成長していきたいと思います。そして私たちが現場へ出たときには、今よりももっと多くの EPA 看護師が働いていることを願って、活動を続けて行きたいと思っています。